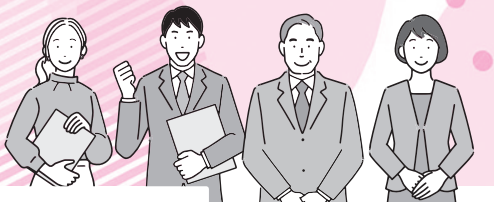
援プロジェクト



高校生が地元企業を取材

小松島市役所では、若者のキャリア教育や地元定着を目的に、県内大学生や高校生を対象として、夏休み期間、3から5日間の日程でインターンシップを受け入れています。本年度は徳島県立小松島西高等学校の生徒を受け入れ、3日間、市役所業務研修や普通救命講習、図書館での就業体験などの実習を行いました。

今月は、インターンシップの2日目、地元企業2社を訪れた5人の生徒によるインタビュー記事を紹介します。

インターンシップ初日挨拶

株式会社日新　四国工場

宮脇颯麻・斎藤真希（共同執筆）

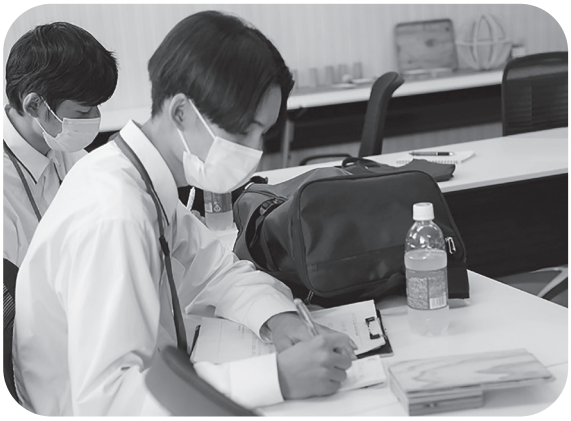
今回僕たちは、株式会社日新四国工場を訪ねました。日新四国工場は原木を削り薄くした板を何枚も重ね合わせて、合板を作っている会社です。

はじめに工場内をまわりながら、会社の利益と合板を作る過程について教えていただきました。

まず利益について。この工場では原木の皮や原木を削る際に出る削りカス、製品をカットした際に出る端材などをそのまま廃棄せず、全て使うようにしています。それらはバイオマスボイラーの燃料として使い発生させた熱エネルギーを工場全体の熱エネルギーとして使っているのです。これにより化石燃料（油系の燃料）を使わずに熱エネルギーが作れるのでコスト削減になるそうです。ほかにも、別の工場では水蒸気でタービンを回しバイオマス発電もしていると聞きました。

このように日新四国工場さんは、たくさんの原木を無駄なく有効活用することで利益を生み出しているのです。今回工場内を案内してくださった福本さんも、「利は元にある」とおっしゃっており、まさにその通りだと感心しました。

次に合板の製造過程について。最初に60度の熱のある大きなコンクリートの部屋の中で丸太を蒸します。この熱はバイオマスボイラーから送られてきます。蒸した後丸太は別の機械に移動させ薄く削っていきます。ここで形にならなかったものや薄いものが規格落ちとして排出されますが、これはボード会社（ＭＤＦ）の素材として提供しているということで、徹底して無駄を減らし、一本一本をフルに活用しておりとても環境に配慮しているなと思いました。そして、検査に通ったものはまた大きな機械の中でバイオマスボイラーから送られた約180度の熱と風で乾燥させていきます。なぜ乾燥させるのかというと木材に水分が残っているとうまく接着剤がつかないからだそうです。乾燥途中でちぎれてしまう板ができるようですが、別のちぎれた板とつなぎ合わせて利用しています。そうしてできた板に接着剤を塗り、重ね合わせ135度の熱と圧力でくっつけることで合板が完成します。最後に完成したものを研磨し、厚みを均一にし検品し出荷されていきます。こうしてできた合板は、木造住宅の屋根、壁、床に使われており、休憩室のある建物の机や床、壁にも使われていました。ほかにも、体力、健康維持のためのトレーニングルームや、シャワー室などもあり設備が充実していました。

一通り案内が終わると、部屋を移動し、お話を聞かせていただきました。いくつか質問をさせていただきました。その中で特に印象に残ったものが工場の安全対策について、仕事は辛くないのかなどです。工場の安全対策は、まず従業員すべてに念入りに注意をし、そのうえで設備にセンサーなどをつけておき、もしものことがあればセンサーが反応して機械停止をしてくれる、というもので安全対策に力が入っているのだなと思いました。それでも事故が起こるときは起こるので事故を起こさないように一人一人が注意して作業をする必要があるとおっしゃっていました。そして、仕事については「大変だけどやりがいがある、楽しくやっている」ということでした。

３日間のインターンシップの中のとても短い時間でしたが、貴重な体験ができて本当によかったと思っています。忙しい中工場内の案内をしてくださった福本さんと松下さんに改めてお礼申し上げます。